2023 2 FEB No.413
ARCHITECT
THE JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS

CONTENTS

地域会だより ―― 1

連載【隔月 全6回】大阪建築家ものがたり
第5回 – 綿業会館 – ―― 2
倉方 俊輔

第38回JIA 東海支部設計競技 2次審査結果
「しごと」と生きる家 ―― 4
・結果と審査員紹介 ―― 4
・審査経過 間瀬 高歩 ―― 4
・審査総評 生田 京子 ―― 5
・金賞「こども渋谷家劇座」山田 紗子 ―― 6
・金賞受賞者の声 安井 千尋 ―― 7
・銀賞「蕗の路を歩もう」高瀬 元秀 ―― 8
・銀賞「生活が溶け合う家事分担住宅」生田 京子 ―― 8
・銅賞「私がなしうる傷を纏う住まい」南川 祐輝 ―― 9
・銅賞「存在の身振り」水谷 夏樹 ―― 9
・銅賞「すまい解く、むすびめ」石川 翔一 ―― 10
・山田紗子ゲスト審査員特別賞
「一杯につき1%をいっぱいに
～森林と生活を守るコーヒー農園BC(ベースキャンプ)～」山田紗子 ―― 10
・奨励賞「回転による転回の家」「見られる刺激、見る刺激」 ―― 11
・審査を終えて 山田 紗子 ―― 12
・山田紗子氏 記念講演会 羽柴 順弘 ―― 12

静岡発
「静岡地域型カーボンニュートラルを共に考える」を聴講して 13
秋山 元

三重発 ～2022 Study Session3～ 向口 武志 氏 講演会
「まちの移ろいとその行方」 ―― 14
伊藤 大智

会員のステージ
世界劇場会議名古屋(ITCN)フォーラム2022
「名古屋市の新しい市民会館を考える」報告 ―― 15
細井 昭男

保存情報 第253回
登録有形文化財:杉浦家住宅主屋、同書院 ―― 16
野口 和樹

編集後記 ―― 16
宇野 享・鈴木 利明

第54回 中部建築賞の入賞・入選・特別賞作品決定 17

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部
・2/24 第8回支部役員会(持出し役員会in常滑)

■JIA静岡地域会
・2/9 静岡地域会役員会の開催(WEB同時開催)
・2/17 静岡住振協研修会 能作文徳 『URBAN WILD ECOLOGY』

■JIA愛知地域会
・3/3 企業PR会(WEB併用)
・3/3 第9回役員会(WEB併用)

■JIA岐阜地域会
・2/10 JIAの窓③(建築研修旅行、滋賀県方面)8:00～17:30
・2/16 第10回役員会 18:30～20:30

■JIA三重地域会
・2/4 建築文化講演会2023 講師:永山祐子「建築というきっかけ」
場所:アスト津 アストホール(津駅前)
・2/17 第6回役員会・第5回例会(オンラインにて)

JIAに入会して

正会員

葛島 隆之(JIA 愛知)
葛島隆之建築設計事務所

JIAには、東海住宅建築賞・新人賞・優秀建築賞など色々なアワードがあります。先輩建築家や、違う地域で活動する年の近い建築家の受賞を見て、とても勉強になり刺激を受けます。入会によってエントリーフィーもディスカウントされるので積極的に挑戦しようと思います。

正会員

六浦 基晴(JIA 愛知)
エムサンク_アーキテクト一級建築士事務所

設計活動に際し、私自身も様々な取り組みを行ってきましたが、やはり建築という目線からするとまだまだ足りていない部分が多くあると感じ、JIAの門を叩きました。これからどんなワクワクと巡り会えるのかとても楽しみです。最後にJIAの入会にあたり、ご推薦いただきました皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。

表紙 街で見かけた風景 ⑪ 「折れた煙草の吸殻で」

吉元 学 (JIA愛知)
ワーク○キューブ/愛知淑徳大学

車からの景観「オートスケープ」に対して、船上からの景観を「ボートスケープ」と中川運河に携わる竹中克行氏が空間コード研究の中で名付けた。移動のスピードによって見え方が変わるということである。都会でたばこの吸い殻を見つけるとマナーの悪さを感じてしまう。対して田園で見つけたときには作業するおじいちゃんの一服する姿が目に浮かぶ。事物に対する時に自分の置かれた環境と向かい合うのだろう。

「ラスベガス」1978年 R・ヴェンチューリ著 鹿島出版会
「空間コードから共創する中川運河―「らしさ」のある都市づくり」2016年 竹中克行編著 鹿島出版会

大阪建築家ものがたり

全6回連載

第5回 綿業会館

90年前の記者とともに

国の重要文化財に指定されている「綿業会館」を設計したのは、大阪に建築設計事務所を構えた渡辺節で、1931年12月に竣工した後、1932年5月号の『新建築』に記事が掲載されている。

表題に「日本綿業会館を観る」とあるように、記者が訪問するような体裁をとっている。したがって、私たちは約90年前と現在とを重ね合わせることができる。始まりの一文を引用したい。

「大阪市の堺筋で下車して、白木屋の通りを西に入ること三丁ばかり、備後町三丁目の角に、渡辺節氏設計、清水組大阪支店の施工で日本綿業会館が建つた」。堺筋は大阪の中心部を南北に走る通りの一つだ。道幅が明治の終わりから大正初めにかけて拡げられ、市電が走るようになった。記者が下車したのも、この路面電車の駅だろう。

角を曲がる目印となっている「白木屋」、これこそが大正期に隆盛を極めた堺筋を象徴する言葉となる。道路拡幅と市電開通に伴って、堺筋沿いには1917年に三越ができた。1921年には白木屋、1922年には髙島屋、1925年には松坂屋が開業し、東京や京都、名古屋を発祥とする百貨店が本格的な店舗を続々と構えたのだった。けれど、大正末に、500mほど西側に並行して走る御堂筋の拡幅が発表される。それが昭和に入って地下鉄御堂筋線の開通と併せて実現されていくと、商業のメインストリートの地位は御堂筋に取って代わられていく。記事は1932年7月に堺筋から撤退した白木屋の名を書き留めて、大正モダンとともに短くも印象的だった堺筋の繁栄を記録している。

続いて、現地に到着した記者は、建築の全容を見渡す。「鉄骨鉄筋コンクリート造の六階、タイル張のややコロニヤル風を加味した、おとなしい外観である」。当時の雑誌の写真では、低い街並みの中にこの建物だけがすくっと建っている。さすがに現在の眺めは、それとは変わっている。それでも、ここは船場と呼ばれる大阪の中心業務地区なので、周囲に超高層ビルが林立しているわけではなく、綿業会館は街に溶け込みながら落ち着いた存在感を放っている。それは竣工時よりも、むしろ設計者が想定した街並みとの関係に近いだろう。

外壁が地味だが洒落て見えるのは、よく観察すると、煉瓦とは異なる大きさで縞状の模様を施した無釉タイルを市松状にまとわせているからだ。この建築の中心は会員制の倶楽部である。よって、商業建築のように通りから人を招く必要はない。オフィスビルのように威厳を要求されるわけでもない。「おとなしい外観」は、そんな目的に合わせた装いなのだ。

玄関だって、建物全体から比べたら小さい。くぐれば、そこは二層吹き抜けの広々した玄関ホールである。初めに入った人は、内外のギャップに驚かされる。それが何度も訪れているうちに、共有の世界に包まれているといった安心感に変わるだろう。

設計者である渡辺節は、1922年に完成させた「大阪商船神戸支店」（現・商船三井ビルディング）や、1925年の「大阪ビルヂング」（現・ダイビル本館）などの仕事を通じて、関西の財界の信頼を獲得した。そして依頼された倶楽部の建築に、それにふさわしい意匠と空間を造形したのだった。

一貫した意匠

綿業会館を訪れることが、時の隔たりを乗り越える体験でありえているのは、運営主体の一貫性も要因である。

玄関ホールの正面に、東洋紡績（現・東洋紡）の専務取締役を務めた岡常夫の像が座している。1927年に没した際に、私財を繊維業界発展のために利用してほしいという意思を表明し、遺族が100万円を寄付した。これに関係業界からの50万円の寄付を合わせた合計150万円をもとに「日本綿業倶楽部」が製糸業や織物業を中心とした企業のオーナーや経営者たちの社交倶楽部として発足し、会館が建てられた。当時の150万円は、現在の約75億円に相当する。

綿業会館は今も、日本綿業倶楽部によって維持されている。よって、内部がどのように使われているのかも、竣工時の記事を参照することが可能だ。

「建物の使用目的は一階二階三階をクラブの各室に、四階五階を貸事務室に、六階を大食堂に、屋上はゴルフ練習場に、地下階は大衆食堂に分けてある」と書かれていたもののうち、現在は屋上がゴルフ練習場ではなくなり、6階の大食堂は大ホールとなっているが、その他はほぼ変わらない。

具体的な意匠はどうだろう。綿業会館が国指定重要文化財になっている理由には、特に1～3階の倶楽部の各部屋にすべて異なる意匠が施され、それが第二次世界大戦以前の様式に基づいた建築の到達点の一つを示す完成度を備えて

いることがある。

ただし、当時の『新建築』の記事は、様式にあまり力点を置いていない。文章量が多いのは、地下の食堂である。「モダン調の勝つた明快な室」と形容し、「グラス・モザイツクも好もしい味が出て居る」と褒めている。今もガラスモザイクは健在で、確かに館内でもすっきりとした雰囲気を備える。

対する倶楽部関係の部屋については、2～3階が吹き抜けとなった談話室のみ具体的に記述されているが、その内容は「ゴージアスな雰囲気を造り、最も評判がよい。室内に現はれた階段もこの室としては成功して居る」と、どこかよそよそしい。

竣工した1931年という時代

変わって、私が記す必要がありそうだ。

1階の玄関ホールの右手には会員食堂がある。豊かな装飾が天井に実るネオ・ジョージアン様式だ。上階に移ると、特別室は繊細なクイーン・アン様式で、華族の邸宅を思わせる優美さを持っている。隣の会議室に移ると一変して、アンピール様式のインテリアが簡潔な威厳を漂わせる。同じ階には2層吹き抜けの談話室もあり、こちらはジャコビアン様式に基づきながら、独特の創作が多く見られる。天井まで続く泰山タイルのタペストリー、アール・ヌーヴォーを連想させる曲線が絡みつく階段も、室内の高さを演出している。各部屋のインテリアは見事なまでに異なる。クラフトマンシップが全体を統合している。民間の資金でここまでの質の建築を作らせ、今も維持しているという事実が、大阪の文化の厚みを物語っている。

『新建築』が様式をあまり評価していないのには、当時の潮流も関係しているに違いない。綿業会館が掲載された号では、山田守が設計した乾式工法の住宅に多くのページを割き、構法的な詳細を紹介している。巻末の批評文では、様式を排した「朝日ビルディング」（竹中工務店、1931）でさえも、その鉤の手に曲がった夜間照明やキラキラと光るステンレススチールは表層的な遊びではないかと疑問視されている。

1931～32年の時点で、過去の様式に根ざした建築が現代的なものであると考えられていなかったのはもちろん、すでに思想の最前線が意匠の変革ではなく、社会的あるいは構法的に建築がどのようにつくられるのかを変えることに置かれていたことがうかがえる。綿業会館の様式が直接に論じられていないことも腑に落ちる。

とはいえ、綿業会館が誌面で無視されているわけでもない。それに記者が訪問するような体裁は、現在にも通じるような親しさを備えている。これらのことは『新建築』の性格と関係している。

『新建築』が大阪で始まった雑誌であることは、あまり知られていないかもしれない。2022年の『新建築』1月号から11月号で、この創刊の頃をめぐる論考を石田潤一郎氏と共に隔月で連載した。

1925年に住宅雑誌として創刊された『新建築』は、読者にヒットする誌面を模索しながら、漸進的に方向性を変えていった。時代が大正から昭和に変わり、社会が変容する時期だ。建築に関して言えば、モダニズムが浸透する重要な数年間である。これらのことと連動しながら、最初の1925年8月号から、編集部を東京に移して発刊した1930年11月号までを中心とした『新建築』が、どのような性格を帯び、何を誌面に反映させていったのかを私の担当分では記述した。

なぜなら、『新建築』が生まれたことの偶然性、あるいはメディアとしての性格が歴史的に論じられることが、これまで無かったからである。その有名度からすると意外かもしれないが、「中心」とみなされているものこそが、分析される眼差しをすり抜けてしまうというのは理論上はありえる。続く時代については、また別の論考を計画中だ。

他のすべてのメディアと同様、媒体は無色透明ではない。最初期に大阪で培われた性格は、第二次世界大戦後の『新建築』の変転にも影響を与えている。それは綿業会館の設計にチーフアーキテクトとして携わった村野藤吾についても同様だろう。

倉方 俊輔
大阪公立大学教授
建築史家

第 38 回 JIA 東海支部設計競技　2 次審査結果

「しごと」と生きる家

■日時：2022年11月26日（土）12:00～18:00　■会場：TOTOプレゼルーム1・2（TOTOテクニカルセンター内）

【金賞】	「こども渋谷家劇座」	安井千尋（金沢工業大学建築学科）
【銀賞】	「蕗の路を歩もう」	坂井優太、後藤柊平、竜沢伊吹、犬飼采那、磯村今日子（名城大学理工学部建築学科）
【銀賞】	「生活が溶け合う家事分担住宅」	奥川祐里菜（近畿大学工学部）
【銅賞】	「私がなしうる傷を纏う住まい」	松山美耶（大阪工業大学大学院研究科）
【銅賞】	「存在の身振り」	安田壮馬（福井大学大学院安全社会基盤工学）
【銅賞】	「すまい解く、むすびめ」	山本晃城（大阪工業大学大学院研究科）
【山田紗子ゲスト審査員特別賞】	「一杯につき1％をいっぱいに ～森林と生活を守るコーヒー農園BC（ベースキャンプ）～」	渡辺龍平（北九州市立大学院環境工学部）
【奨励賞】	「回転による転回の家」	諸江一桜（秋田公立美術大学）
【奨励賞】	「見られる刺激、見る刺激」	児玉征士（法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻）

■審査員（順不同・敬称略）⊙：審査員長　◎：ゲスト審査員

⊙生田 京子
名城大学/JIA会員

◎山田 紗子
山田紗子建築設計事務所

石川 翔一
1-1 Architects
（現在は 石川翔一建築設計事務所）

高瀬 元秀
タカセモトヒデ建築設計/JIA会員

水谷 夏樹
水谷夏樹建築設計事務所

南川 祐輝
南川祐輝建築事務所/JIA会員

■審査経過

はじめに、設計競技開催にあたり、会場提供企業・協賛企業の皆様方には、多大なるご支援を賜り、厚く感謝申し上げます。

2022年度の第38回設計競技2次公開審査・表彰式・記念講演会は、11月26日（土）TOTOプレゼンテーションルームに於いて開催した。今回の設計競技のテーマは、生田京子審査員長より『「しごと」と生きる家』として出題された。入賞者の作品は、生業と家、生きることと家、家族や周りの人との関係性などについて深く掘り下げられ、多様な住宅が提案された。

2次公開審査の方法は、1次審査で選ばれた7作品の応募者が1組ごとに5分間のプレゼンテーション、審査員から10分間のヒアリングを行い、その後全体の公開審査・投票を1時間掛けて行った。公開審査では、作品1点1点について振り返りながら応募者と審査員とのディスカッションを行うこととしている。議論を重ねながら作品を講評していく公開性を持たせた審査方法は、設計競技における特徴のひとつである。

審査結果は、審査員が5点満点で各作品の評価付けを行い、『こども渋谷家劇座』が審査員協議の上、金賞に決定した。そのほかの作品は銀賞2点、銅賞3点、山田紗子ゲスト審査員特別賞1点、奨励賞2点、上記の方々の審査結果となった。

2020年初頭からのコロナ禍に伴い、2020年度の設計競技は開催中止、2021年度の設計競技はオンライン審査により開催したが、今年度は会場での対面審査を復活開催することができた。東海支部設計競技特別委員会では、2014年度の第31回以降、社会性が高く時事性のある問題からテーマを設定する方針としている。本委員会では、今後も住まう空間の多様性や建築の可能性を共に考える場を意識しながら取り組んでいきたいと考えている。

間瀬 高歩（JIA愛知）
地域計画建築研究所・設計競技特別委員会委員長

審査風景

入賞者と審査員との記念写真

審査総評

JIA東海支部設計競技は第38回を数える伝統あるコンペで、建築系の一教員として以前から、その特色ある出題や受賞作品などを楽しみにしていました。今年はその審査員長を務めさせていただきましたが、あらためて学生達がのびやかに建築について思考する機会として、東海の地で今後も永くこのコンペが続いていくことを期待します。

本年のテーマ『「しごと」と生きる家』については、審査員およびJIAの設計競技特別委員の方々と議論の上でテーマを設定しました。昨今、急速なICT技術の進展とコロナ禍におけるテレワークの常態化が相まって「働き方」と「働く場」の姿が変わりつつあること、いわば「しごと」のあり方がこの数年で大きく揺さぶられていること、それを１つのきっかけとしてこれをテーマとしてあげました。

しかし上記であげたような狭義の「しごと」と家の関係のみならず、世界中の様々な人々の状況、例えばウクライナ侵攻も含めて、時に国境を越えて生き延びるために「しごと」と家について切実な状況下におかれている方々の暮らしにも思いを馳せた時、より広義に「しごと」と家についてとらえ、飛距離のある提案を見たいという期待もこめて、テーマ文は『「しごと」はなりわいと、生きがいが綯い交ぜになり複雑に絡み合う総体であり、今回は「しごと」と生きるをテーマに家を構想して欲しい。』としました。

そのような経緯から、1次審査・2次審査を通して審査員がまず着目したのは、提案者個々が「しごと」をどう捉えたかという点でした。そして期待通り、多様な「しごと」の捉え方を提出作品の中に見ることができました。

１つの大きな括りとしては、日々の生活そのものを「しごと」と捉えてとりくんだ提案がいくつか見られました。例えば「生活が溶け合う家事分担住宅」のようにごく日常の家事を「しごと」として捉えて、繊細に日常の機微をデザインしていく作品や、「すまい解く、むすびめ」のように食べる、勉強する、運動する、話すなどの日常行為そのものを「しごと」として読んで、１つ１つの行為の間に公的空間を挟み込んでいく作品などが見られました。そして金賞の「こども渋谷家劇座」もまた生活・家事に着眼した作品の１つでしたが、あえて日常の生活・家事を劇として取り扱い渋谷の交差点で開き見せていくという力強い提案で、生活の場面をひるがえすごとく「しごと」に結び付けていく構想の大胆さに審査員一同が驚かされた作品となりました。なお個々の詳細な内容については、後段の受賞作の審査評に記されるのでそちらを参照いただければと思います。

もう１つの大きな括りとしては、地域に根付く農業や産業に着眼して、それらとともに生きる家を考えてみる作品がいくつか見られました。例えば「土づくりの家　しごとを受け継ぐ地域移住」などは土工場と住まいが渾然一体となることで、産業の魅力を伝えようとする提案でした。また「一杯につき1%をいっぱいに～森林と生活を守るコーヒー農園BC（ﾍﾞｰｽｷｬﾝﾌﾟ）～」はフィリピンのコーヒー農園に着目し、森林の減少を招く大量栽培の現況からの脱出方法として森を守りながら「しごと」を続けていく家のあり方を構想するものでした。そして銀賞の「蕗の路を歩もう」もまた地域の農業に着目するものでした。蕗の季節ごとの成長の変化と居住域の関わり、成長に必要な温度・湿度と住まいの熱環境の調和、居住者の副業的な参画の仕組みなど様々なレイヤーを重ねるようにして１つの提案にまとめあげているところに審査員の共感が集まりました。

加えて、いわゆる初段に書いたような急速なICT技術の進展とテレワークの常態化などに応えていく案もいくつか見られました。なかでも「見られる刺激、見る刺激」は集合住宅のような群建築の中に住まいとスモールオフィスが綿密に織り交ぜられる力作であり、「MEET　UP」はメタバースと職場と家の関係を設計におとしてみようとした挑戦でした。

また他と括られがたい独自の「しごと」の捉え方をしている作品がいくつかあり、その代表が「私がなしうる傷を纏う住まい」でした。物質の動き＝「しごと」ととらえて住まいの中で身体の動きでできる床や壁の「傷」を「しごと」の可視化とし、新たな感覚を呼び起こさせるような家の提案でした。

2次審査最終は、「こども渋谷家劇座」と「蕗の路を歩もう」で票がほぼ同点に割れました。「こども渋谷家劇座」は構想の鮮やかさと建築形態があえて暗示のように示される点が特徴的な作品であったのに対して、「蕗の路を歩もう」は地域の農業をテーマとして着眼はごく身近にありながら、建築形態に多義を織り込むように空間を組み立てていく作品で、全く異なる取り組み方の提案で審査員の意見が分かれたためです。このように類似した提案が集まることなく、異なるテーマの捉え方、異なる形や質で学生の構想力が示され、大いに議論が活性化したことは何より喜ばしいことです。ここに多数の応募に感謝する次第です。

そして末筆ながら、本コンペの運営にあたり常に柔軟に状況に対応しながら尽力いただいた設計競技特別委員の皆様に御礼を申し上げます。

生田 京子
名城大学/JIA会員

金賞 Gold prize

「こども渋谷家劇座」

安井 千尋（金沢工業大学建築学科）

一次審査から意見が大きく分かれた。プレゼンテーションボードにはタイトル以外、文字が一文字も見当たらず、漫画のコマ割りのように幾つかの場面と、渋谷のスクランブル交差点のダイナミックなドローイングがレイアウトされているのみ。審査員が判断できるのは、そこが渋谷のスクランブル交差点であること、子供たちがなにやら家事をしているということ、そしてそれが劇場的な役割も果たしているということ、だけだった。どのようなメッセージを訴えているのか、それは受け取り側に任せるという、非常に挑戦的な案に感じられ、良いか悪いかは別として、都市や労働＝仕事という事象になにかしらの批評性を感じ、二次審査で話を聞いてみたいと思った。

二次審査のプレゼンテーションでは、描かれている子供たちが孤児であること、子供だけで暮らす彼らが、自らの生活をショーとして見せることで生活費を養うシステムであること、など驚きの内容が明かされた。つまりこの提案での「仕事」は、彼らが生きる上で必要不可欠な家事や「生活」そのものであり、同時にそれが都市の表層の一部を成す「パフォーマンス」でもある。現代日本社会の、「仕事」は「生活」を成り立たせるための手段であり、建築はその二つを区切り、「生活」を隠し、「仕事」の下支えをするものである、という認識や慣習に大きな批評を投げかけていると感じた。

考えてみれば、渋谷のスクランブル交差点を歩く人は、みな何かを演じているのかもしれない。急ぎ足に歩く人、高いヒールを鳴らしながらさっそうと歩く人、制服姿の高校生たち、大きなショップバッグを肩にかけて歩く人。彼らは「こうありたい」自らを表現し、世界でも唯一無二な交差点を闊歩する。それを井の頭線前のコンコースから眺めると、都市の表層、たとえば交差点を見下ろす大型ビジョン、グランドレベルのショーウィンドウ、斜めに交わる横断歩道の白線、と人々の立ち振る舞いが呼応し、終わりのない群像劇そのものだ。

住まい手（働き手）を「こども」に絞ったのも上手い。なぜなら子供たちにとって、遊びも生活も仕事もシームレスに行われることが多く、またそれらは他人の目（観客）があることによって、より意味あるものとなるからだ。子供は大人より、労働と賃金の関係に素直であり（素直であることが許されている、とも言えるかもしれない）この無謀な設定も、もしかしたらあり得るかも、と想像させてしまう突破力を持っている。

もちろんこの提案や前提は現代日本社会では難しい。外観のみ描かれている建築自体もまだイメージに過ぎないもので、より説得力のある設計が必要だ。しかし、「仕事」とは「生きること」であり「パフォーマンス」でもあり、都市はそれらの集合体でつくられている、と思いたくなるような迫力あるドローイングと画面構成にやはり票を投じた。金賞おめでとうございます。

山田 紗子
山田紗子建築設計事務所

第38回 JIA 東海支部設計競技

「こども渋谷家劇座」金賞受賞者の声

●こどもたちによる家事生活

仕事は外に出て、働くことだけではない。家事も仕事の一環である。世界的に見れば、家事は女性だけでなく、男性も積極的になっている。しかし、日本ではまだまだ家事は女性が行うものだと見られている。それは、幼少期の女の子に家事を学ばせる文化があるからだろう。幼少期に植え付けられた記憶を払拭することは難しい。そのため、子供たちだけで家事を担って生きていくことで、家事に対しての嫌悪感は無くなるのではないだろうか。これが今回の「こども渋谷家劇座」が開演するまでの第一歩である。

●建物が渋谷スクランブル交差点上

建物をスクランブル交差点のド真ん中に建てるのか！日々忙しない人たちが通る、目まぐるしい渋谷スクランブル交差点。そのようなところで生きる人たちに少しでも生きる希望を見つけてほしいと思った。子供たちの存在はエネルギッシュで、同じ空間にいるだけで、力を与えてくれる。そんな子供たちが自分たちだけで家事をこなし生きていれば、私たち大人も精一杯、生きなければならないと勇気づけられる。そんな思いが世の中に溢れるように、人々で賑わっている渋谷スクランブル交差点に建物を建てたいと考えた。

●劇をする子供たち

家事は生きていくために必要な営みだが、単純に家事を行うだけでは面倒な気持ちが過り、家事に嫌悪感が発生する。子供たちの遊びに「おままごと」がある。その、おままごとの要素に家事を導入することで、楽しみながら家事に触れることができると考えた。しかし、子供たちだけで生活をしていくので、本格的な演技を披露したい子供たちの思いから、公演時間を決めている。子供たちが帰宅している時間と、交差点の通行人が多い時間に合う時間を公演時間にしている。料理を行っていれば、香りが町中に漂い、食事の時間を知らせる予鈴の役割や献立を考える参考になり、子供たちの影響を町中に与えられる。そして、仕事への活力を得た大人たちは、子供たちへ服などの寄付を行ったり、子供たちが安全に成長をするために地域住人が日常的に見守る。地域全体は家事の仕事によって、幸福の循環で満たされる。

●建物の歪な形状

家劇座は家事を行う場所が固定化されているので、交差点の様々な角度から様々な演目内容を見ることができる。その為、一か所の公演に視点を集めるために、開口部を小さく設けている。また、交差点へ向かう途中に遠目からでも公演に興味を引かせるために、建物のボリュームを大きくしている。交差点の信号の待ち時間は、小さい開口部の隙間から観劇し、観客から見えない部分は観客が劇を想像する仕掛けとなり、興味を抱かせる。歩道を通過する時に、チラッと公演が観え、滞在意欲を沸かせる空間となっている。また、建物が逆三角錐のような形状になることで、交差点の様々な視点から劇場を感じ取れ、小さな開口部から劇に引き込まれる空間になっている。

●最後に

子供たちのエネルギーは計り知れない。大人が考える以上に、子供たちは面白い視点で冒険をしている。次は何をするのだろうと、ワクワクさせられるのだ。予測不可能な行動が魅力的な子供たちを、建築によって、より引き出すことはできないだろうか。この設計競技に取り組む前は、子供だけで生活を担っていくことが果たして可能なのかとネガティブに捉えていました。しかし、人間は集団で生きていく種族。それならば、子供たちだけの集団で劇を行いながら、地域住民と関わりを持ちつつ、生計を成り立たせることができると捉え直すことができるようになりました。

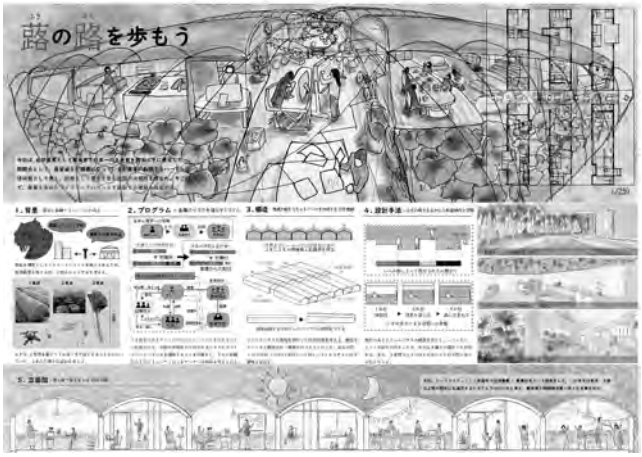
審査会では、この提案が企画で終わり、車が交差点をどう通過するかなどの、リアルな部分が想像できずにいました。建築を学ぶものとして、現実的な提案を詰めていく必要があるため、子供たちの性質と町の関係性がどのように成り立っていくのか考えていきたいです。

この作品を通して、子供たちと町の関係性について審査員の方々と議論することができ、大変貴重な経験となりました。審査員の方々や関係者の皆様にはこの場をお借りして、感謝申し上げます。

安井 千尋
（金沢工業大学建築学科）

銀賞 Silver prize

「蕗の路を歩もう」坂井優太、後藤柊平、竜沢伊吹、犬飼采那、磯村今日子（名城大学理工学部建築学科）



日頃からローカルのローカルで仕事をしているので、地方に目を向けた案が出てこないだろうかという期待があった中、農業分野で地方に対しての提案がいくつか見られた。

２次審査にはそんな農業系の中から２案が残り、一方は海外に目を向けた案、一方は国内の農業の課題に目を向け案で、「蕗の路を歩もう」は後者のものである。

農家減少、農家への転職のハードルの高さ、農業技術の習得期間など、農業分野での社会問題を解決しようとするもので、ビニルハウスと農業転職希望者のための住戸が交互に並び、ビニルハウスで生産される蕗と住空間が関係しあう構成となっている。

平面のつまらなさや、各住戸の関係性の弱さなど、ツッコミどころはいくつかあったが、住戸の窓から蕗が揺れる景色が脳裏に浮かび、見たことのない新しい景色が広がっているのではと期待させられた。

「しごと」を深くとらえ直し、建築として表現するような案とは違ったが、リサーチから課題を見つけ、提案により解決を図ろうとした真面目な案で、審査員の総合的な評価は高かったように思う。振り返ってみると、二次審査に残った中で唯一のグループでの応募だったようで、グループの利点をうまく活かせたのではないだろうか。

今回は農作物が蕗であったが、どんな農作物でも可能な案と思えたし、農作物の品種によって建築側がかたちを変えても面白いと感じた。もしかしたら日本の農地(ローカルのローカル)の景色を変える可能性を秘めた案なのかもしれない。

高瀬 元秀
タカセモトヒデ建築設計/JIA会員

銀賞 Silver prize

「生活が溶け合う家事分担住宅」奥川 祐里菜（近畿大学工学部）

本提案は家事を「しごと」と捉える提案でした。ささやかな日常に着目するような視点でありながら、場の作り方は極めて繊細で、見れば見るほど生活のシーンが暖かな連続として浮かび上がってくるような平面図が評価されます。大きなワンルームは家具などで緩やかに区切られ、個々の家族の主滞在スペースや寝室が設定されながらも、その合間を家事のための仕掛け（キッチンや洗濯干しなど）が繋いでいきます。結果として、おばあちゃんと娘で一緒に洗濯をする、朝起きてキッチンに向かうお母さんと、さりげなくその間赤ちゃんを見守るおばあちゃんおじいちゃんなど、3世代が溶け合うように共働しながら生活する息遣いがうまく空間化されていました。

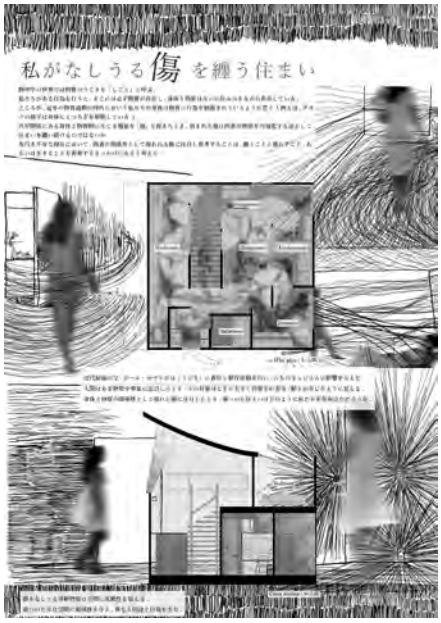
また家に入る玄関が複数あり、個々の家族の動きや地域を呼び込む関わりなどを担保しているところ、さらにどこからともなく外部と内部が連続していく場など、建物内と外が曖昧につながっていく点はこの案の伸びしろであり、それゆえに設計者がその可能性をより自覚して探究→提示してほしい点でもありました。

全体に建築が強く語りかけるのではなく押し付けるのでもなく、空間的な纏まりが家事などをとおした家族の共働を促している点などが魅力的な提案でした。

生田 京子
名城大学/JIA会員

銅賞 Bronze prize

「私がなしうる傷を纏う住まい」 松山 美耶（大阪工業大学大学院研究科）



ごくありふれたプランの住宅内部に可動物質を設置する。その可動物質によって空間に流動性が生まれ、身体や物質が動いた結果できる傷や痕跡が両者の関係を可視化する証として住まいを纏う、という案。

ただそのプランも階段の幅が広かったり、断面が一致していなかったりと様々な要素が微妙にずれていて狙ってプランニングされているのか、あるいは稚拙なのか判然としない部分があり謎めいている。

ドローイングは非常にノイジーな様相が印象的であり、それは傷とも言えるし空間の中を身体や物質が動いた残像のようにも見える。表現を見ていると私がかつて手書きで作図する際、描いた線に感情を込めようとしていたことを思い出す。このプレゼンから受けとれる印象は決して楽観的なものではない。むしろとても切実で重苦しい心情という風に受けとるよりなく、複雑な感情が紙面に溢れている。

「傷をなしうる可動物質は空間に流動性を加える。傷ついた床は空間に領域性を与え、異なる用途と行為を生む。」と章を結んでいるが、私自分の廻りを見渡してみた時、建具や床などにわずかな傷や痕跡は残るが実際にそこまでのドラマ性があるようには思えない。

察するにこの作中の傷はあくまで作者のイメージの中に存在する「傷」なのか、自身が存在する証なのだろうか・・・。

この作品を最も評価したい点は、一次・二次審査を通じて作者が自分自身の言葉で語り表現したことが強く審査側に伝わってきたことである。作品の是非に関わらず何かを創作する際に「自分であること」は最も重要なことだと考える。

南川 祐輝
南川祐輝建築事務所/JIA会員

銅賞 Bronze prize

「存在の身振り」 安田 壮馬（福井大学大学院安全社会基盤工学）

まずは私が新型コロナウィルスに感染してしまったために二次審査に参加できなかったことを応募者、審査員の皆様にお詫び申し上げます。

審査の様子はzoomを通して聞いていましたが、この「存在の身振り」は参加できていればもう少し押してあげたかった案でした。

本作は一次審査の時点で何点かあった「住宅を過剰に広く設計する」試みのひとつですが、これはひところの狭小住宅ブーム(?)にかわって、土地余りの時代における設計テーマになり得ると思いました。その中でも本作は単に内部空間を肥大化させるのではなく、内と外の関係にも拡張しようとした点で頭一つ抜きんでていた印象です。各室と中庭の主従関係が逆転して、通常は単なる外部空間でしかない中庭がこの住宅では主室となり、逆に内部空間がデポ化したサーバントスペースとなる発想は鮮やかで、中々日本の住宅ではできなかった外部に住む生活の提案となっています。

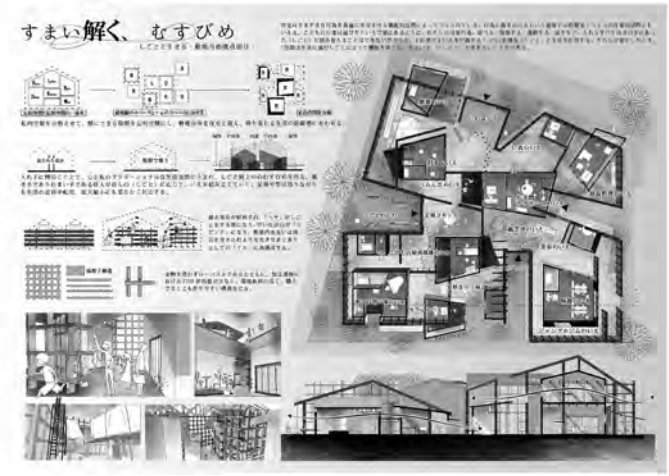
惜しいのは内外の境界面の関係性が希薄な事で、各室から家具が運び出されるだけでなく、もっとダイナミックな接続がなされれば、中庭が時間ごとに全く違う空間となったように思います。換言すれば、各室からの視覚的な接続については窓の形状や位置、厚みの丁寧な検討がなされていましたが、身体的な接続が扉、あるいは引違窓程度のバリエーションしかなく、ここにもっとラディカルなアイディアが組み込まれていれば・・・金賞に押したかったなというのが個人的な感想です。

とはいえ、「しごと」というお題に意匠的な設計テーマを掛け合わせた射程の長い問いは、評価されるにふさわしいものだったように思います。

水谷 夏樹
水谷夏樹建築設計事務所

銅賞 Bronze prize

「すまい解く、むすびめ」 山本 晃城（大阪工業大学大学院研究科）



課題文「しごと」と生きる家について、応募者の作品は「しごと」とは　労働(＋α)＝「しごと」と応えるものと、労働と別概念＝「しごと」と応えるものに大別された。その上で２次審査に残った作品はどれも‘生きる’ことに全力で向き合ったものであり、その執念、生々しさ、匂いのようなものが各審査員の心を突き動かしていたように思う。

本作は「しごと」について、賃金を得るための労働でなく、家事や遊びなど日常生活のすべての行為がそれにあたると解釈したものである。上述の、労働と別概念において「しごと」を定義したものであり、労働や家庭の在り方が多様化する現代において、すべての行為が平等に並べられた建築の在り様は興味深く、探求テーマとして新鮮であった。

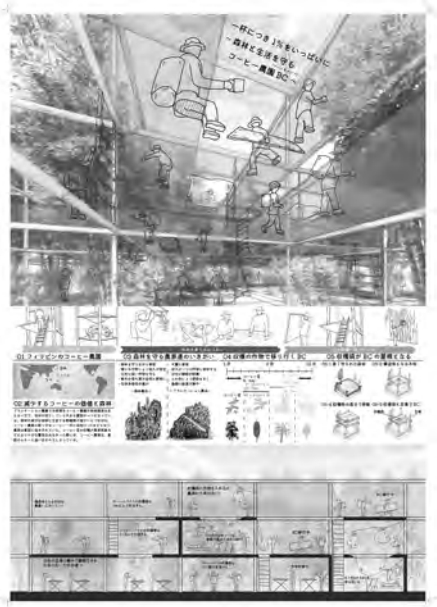
設計者は「しごと」を行う‘私’の空間を分散配置した上で、‘公’の空間によりおおらかに包み込むように建築を設計している。人々の行為が集積する様を示すように、複数の形態が重なり合うように建築が造られ、そこから様々な人の活動が想起された。複雑な構成が出来上がっているが操作は明快で、木格子などを用いた透明感のある空間は完成度が高い。この建築は無意識に行われる行為の連鎖と拡張を生み、それが確かな意識へ接続していく可能性を示している。意識を前提とするからこそ、地域が大家族的に成長していく未来像にも共感するところがあった。

自身の設定する「しごと」を行う空間同士の差異・特徴への言及が少なく、‘生きる’ことへの執着があと一息であったが、全体から細部に至るまで設計の痕跡が感じられる力作であった。

石川 翔一
1-1 Architects
（現在は 石川翔一建築設計事務所）

山田 紗子ゲスト審査員特別賞 Special prize

「一杯につき1%をいっぱいに ～森林と生活を守るコーヒー農園BC（ベースキャンプ）～」 渡辺 龍平（北九州市立大学院環境工学部）



農業とは本来一番人間の生活に近接した仕事であり、農作地では植物の成長サイクルに合わせて風景がダイナミックに変化する。そのため「もし農地と住まいが一体となっていたら」という問いに可能性を感じ、いくつかの農業と住居を扱った案が提出された。その中で、農業のサイクルによって、住まいの場所や形がどんどん変わっていく、動的な住まい方を描く本提案に魅力を感じた。

１次で提出されたプレゼンテーションボードでは、簡単な断面イメージと、下から見上げたようなパースだけが提示されていたため、２次のプレゼンテーションで、森林農法と住居がどのように絡み合うか、より詳細な建築のフレームのイメージや、いかに住居が変化していくのか、具体的な説明を期待したが、１次以上の提案がなされていなかったのは勿体ないと感じた。また、単一の作物を並べるプランテーション農法より、森の環境に合わせて複数の作物を入れ込む森林農法を選択することで、さまざまな農作物が１年を通して栽培・収穫され、そのダイナミズムに合わせて人間の居場所も移動を余儀なくされるという設定も興味深かった。設定だけでなく、なにかしらの設計の提案も伴えば、より広範囲の支持を得ることができたように思う。

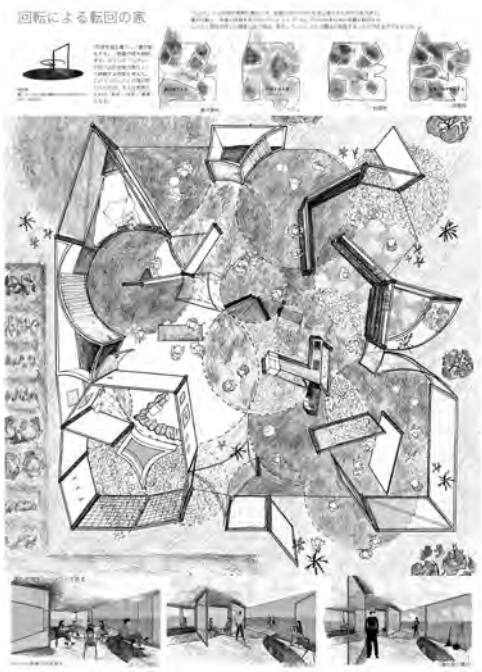
一般的に建築は一度完成してしまうと動かないし、大きな変化もない、静的なものだ。一方で、屋外の自然環境というのは、動植物が日々動きまわり、環境の形を自在に変化させていく。そこには自然界のデザインが存在する。人間という生き物が、その中でどのように生きることができるのか、この根本的な問いを私自身も考え続けたいと思った。

山田 紗子
山田紗子建築設計事務所

奨励賞
Incentive prize

「回転による転回の家」

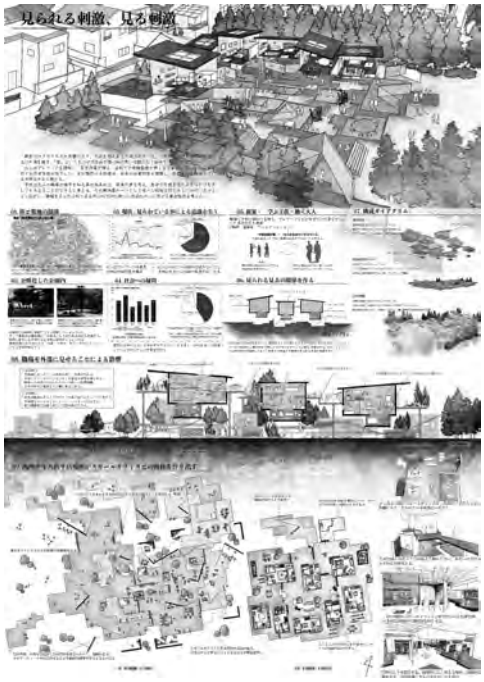
諸江 一桜（秋田公立美術大学）



奨励賞
Incentive prize

「見られる刺激、見る刺激」

児玉 征士（法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻）



「審査を終えて」

課題文の投げかけに応じる形で「しごと」という言葉が多様に解釈された案が集まった。仕事の内容が、農業であれ、家事であれ、リモートワークであれ、それが人の生活にどのように交わり、そのことによって住まい方、ひいては建築はどう変わるべきなのか、そのことが議論される予感があった。二次審査に進んだ案はどれもそのような議論になにかを投げかける可能性があるものだった。

「生活が溶け合う家事分担住宅」「すまい解く、むすびめ」「存在の身振り」これらの提案は、「しごと」と実際の生活の在り方を丁寧に想像しながら、主にプランニングにおいて新しい住まい方とその形を提案しようとしていた。「すまい解く、むすびめ」がさまざまな機能を持つ場をシームレスにつなぎ合わせることで、生活と「しごと」が混沌とまざりあう住まい方を提案するのに対し、「生活が溶け合う家事分担住宅」では、それらをわざと切り分け、部屋と呼ばれる小さな単位の室内にはあえて１つの機能のみを与えることで、その外の空間を自由で交流が生まれやすい空間に定義した。この機能的な部屋と部屋の間をぬうようにつくられた半屋外空間が、機能や意味から解き放たれながらも、人間の所作や立ち振る舞いにちょうど良いスケールをもつ裏側の場となり、どちらが図なのか分からなくなるような、迷宮のようなプランニングが魅力的だった。「存在の身振り」も、機能的空間とその他の空間をきりわける案だ。それぞれの部屋は大きな庭に平等に面しているが、その関係性がひとつひとつ丁寧に設計されていて、大きな原っぱのような庭の周囲をぐるりと囲むさまざまな開口やそこから見え隠れする生活が、一転して何もない庭に微細な起伏をつくっていることに気づき、魅力的な案であると感じた。

「私がなしうる傷を纏う住まい」「こども渋谷歌劇座」は審査員側が想定していた「しごと」の概念を大きく揺さぶる形で議論の幅を広げた。「私がなしうる傷を纏う住まい」で提案された身体と物質の関係性をよりフラットに、応答可能にする、という考え方は非常に面白いと感じた。物質の素材の提案や、それによって変わっていく家の形が提案されていたら、より注目を集める案になっていたと思う。

農業に注目した「蕗の路を歩もう」「一杯につき1％をいっぱいに」は、栽培中に移り変わる風景に合わせて家の在り方が変化する。それが生活に、住まいに、どのように影響するか、一歩進んだ話があるとより面白い議論になったと思う。

山田 紗子
山田紗子建築設計事務所

「山田紗子氏 記念講演会」

2次公開審査・表彰式に引き続き、ゲスト審査委員を努めていただいた山田紗子氏の記念講演会が行われました。

ランドスケープデザイン出身の山田氏は設計をしていく中で「モノが集合する」をキーワードにしており、様々な意図を持って一つのルールや合理性に従って人工的に組み立てられている建築に対して、ランドスケープは様々な物事が連なりながら意思や要素を持ったモノが集合していると感じたことから、その様を設計に生かしたいと考えておられます。

ご紹介していただいた住宅の「daita2019」は、建築とランドスケープの繋がりや関係性の中から「集合」を感じます。植物と住居部分を並列に並べ、植物の成長に伴いながら建築の輪郭が変化していくこの住宅は、屋外の樹木や鉄骨フレームなど線状の集合体が結合されており、その線状の集合体が繋がっていく在り方を木造の住宅部分でも同じように表現できないかと考えられています。

一方で「miyazaki」は色彩豊かな住宅で、設計理念としてフレームを敷かずに家具や建築部材・色を含めた全てのモノが独立型の集合体と感じます。山田氏曰く、この物件で「集合」を突き詰めていく時に建築部材と家具と施主が持ち込む生活用品の主従関係が明白になり、それに対して限界を感じたため、存在感はあるが強制力はない色の在り方を構成要素として使いながら、建築部材を家具と同じような存在感でその場に散らばらせることは可能だろうか、と考えていったそうです。他にも多くの実例や進行中のプロジェクトをご紹介していただきましたが、どれをとっても「モノの集合」という設計理念を基にしてランドスケープと建築の繋がりや関係性を常に意識しており、双方に対しての捉え方や考え方に様々な可能性を感じました。

2次審査・記念講演会の当日はご本人の誕生日、そして設計競技の開催回数と同じ年齢だったということでした。日程が重なったことは何らかのご縁があったのかなと感じるとともに、大切な日に設計競技へ貴重な時間を割いていただき心より感謝申し上げます。

羽柴 順弘
haco建築設計事務所／JIA愛知

「静岡地域型カーボンニュートラルを共に考える」を聴講して

今回のJIA塾の表題に関心を持った私でしたが、会場参加することが出来ず、リモート聴講にさせて頂きました。会場での空気感の中で直接お話を聴くことがベストと考えていますが、近年リモートに慣れて来たのか会場の雰囲気に影響されることも少なく、お話に自分の思いを巡らせるにはリモート聴講も良いものだと感じました。

今回の講演内容は賛同する処も多く、非常に面白く有意義な時間を頂きました。山田貴宏氏の環境建築に視点を置いた説明や、伝統建築構法を大切にしておられる活動には敬意を払いますし、非常な喜びを感じました。自分が50年以上も拘り続けた日本の木造伝統建築に若い世代の建築家が取り組んでおられる姿に感銘を受けました。異議を唱える部分は全く無く、明瞭な説明で解説して頂いたことに感謝致します。自然環境（植栽）と建築の共生のお話しも有り難く感じました。自分事ではありますが、常日頃「建築は生有るものには叶わない」との持論を言い続けていますが、空間に於ける主役は生有るもの（人間や植物等）に成ることが多く、建築はそれらの舞台に成ることが求められるとの考えです。それだけが正しいとは言えませんが、日本の伝統建築には、その空間に於ける人間の存在感や四季に由来する自然との共生を大切に考える一面も有ります。建築だけに依存せず、取り巻く環境に目を向けておられる姿勢にも敬意を払います。

寺尾信子氏のJIA杉並地域会の活動内容にも感心させられました。規制や行政の壁に立ち向かうのでは無く、建築家としてより良い街作りに向けて協力して行こうとする姿勢にも敬意を持たされます。

後に成りましたが、今回のJIA塾は非常に有意義で講演内容も素晴らしく、充実した時間を過ごさせて頂きましたが、一つだけ物足りない部分を感じています。表題のカーボンニュートラルに向けた建築家の在り方に、もう少し異なる視点からも追求して欲しかったと感じました。

自分にも言えることですが、近年の建築家はマニュアル化された建築設計の方向に傾いているようにも思えます。指定材料は新建材が殆どに成り、設計もメーカー仕様や行政指導に頼り、独自のディテールの検討や作製が減少していると思います。CAD普及によるデジタル化の弊害とも考えますが、今回の講演を拝聴しても、カーボンニュートラルに対して建築物の省エネ性能等の機能や使い方に重きを置かれた説明が多かった様にも感じました。脱炭素社会に向けた建築家の在り方にも一石を投じて頂けると有り難かったと感じます。建築資材（設計指定材料）に新建材が多く使われ、自然素材の使用が少なく成っている背景には我々建築家の影響も無視出来ません。カーボンニュートラルを考えた時、完成した建築物の評価に走り勝ちですが、新建材製造に於ける負の要素も考慮すべきだと思います。新建材が全て悪いと言うのでは無く、今回参加しておられたサッシメーカーの方から説明も有りましたが、機能面の改善には努力をしておられます。コスト面や施工性、そして施工技術者の枯渇等を理由に、我々建築家が設計の規格化に走り過ぎていないか、改めて考えさせられる中身の濃い時間を頂けたと考えています。

秋山 元（JIA静岡）

「まちの移ろいとその行方」

●講演者：向口 武志 氏
●開催日：2022年 12月 9日

「まちをみつめる建築家」をテーマに行ってきた全4回連続企画の第3回目となりました。今回は、町並み研究のエキスパートである、向口氏にご登壇いただきました。私は、リモートでの参加となりましたが、「まちの移ろいとその行方」を主題に、世界と日本の歴史的な町の背景と特性、そのポテンシャルについて、お話しいただきました。

○町の移ろいと都市計画

未来の都市とは？と聞かれ、町の姿を想像してみると、高層ビルが建ち並び、道路や緑地が整備された街を想像すると思います。かつて、「人口300万人の現代都市」を唱えたル、コルビジェの都市計画も、高層ビルや、整備された道路等がみられ、その影響もあり、高層ビル群が各都市で建設されました。

一方、現代社会で最も住みよい街の一つにアメリカのポートランドがあります。ポートランドは、自転車の活用を促進し、通勤時間徒歩20分圏内の実現、古い建築物の解体を抑制し、新旧建物の混在と、住居、店舗、工場など複数の用途を混在したミクストユースや、ローカルファーストの根付きで、地産地消、有機栽培が盛んになったことが住みたい町の要因とされています。そのような思想は1960年代に活躍した、ジェインジェイコブズに代表されるモダニズムへの反省の影響とされていると考えられます。

○ジェインジェイコブズの四原則

経済学者、宇沢弘文の「社会的共通資本」において、都市のあるべき姿はこう伝えられています。「都市とは、ある限定された地域に数多くの人々が居住して、お互いに密接な関係を保ちつつ、政治的、経済的、文化的な活動を営む場である」

宇沢 弘文著
「社会的共通資本」

このように、都市にはある程度の密接が必要とされる中、宇沢弘文はさらに、都市開発に必要とされる手がかりとして引用するのが、ジェインジェイコブズの主張でありました。その中から都市の再生基準として、以下の4つを挙げました。

1、(ウォーカブル)：街路の幅は可能な限り狭く自然的に形成された街路が望ましい。

2、(古い建物)：再開発にさいして古い建築物をできるだけ多く残るよう配慮する。

3、(ミクストユース)：都市の各地域は必ず二つ以上の機能を持つようにする。

4、(密集)：人口密度は十分に高くなっているよう計画されなくてはならない。

○平安京から、京都の町つくり

日本の町の特徴としては、京都と城下町があります。まず京都の基盤である平安京の特性は、碁盤目状に配置された道の中心に幅86mの朱雀大路を軸に大路24m小路12mの街路が広がっており、それを基に、条、坊、保、町の順に町が区画され、町は1辺120mとなります。商業施設としては、左京、右京の2つに限定され、それらはすべて塀で覆われているのが古代京都の特徴になります。中世になると、塀で閉ざされた街も、徐々に崩れはじめ人々の繋がりが表に見られるようになりました。15世紀の応仁の乱の後には、大きく変化し、上京と下京の2つの都市に分かれ、塀で閉ざされた町も、道を介した地域共同体へと変容し、さらに17世紀には、豊臣秀吉の天正の地割によって、町屋の建設は容易となり、そこから成熟した町が、今の京都の姿となりました。

向口 武志 氏

○近世城下町の形成

城下町が成熟する以前の町は、博多や堺などの港や寺院を中心に町ができ、また城主がいる城下にも町は形成されるものの、多くの場合、中世の定期市である六斎市が常態化した町場が各地に形成されていき、城下にある町とは別に大きな町が出来上がります。そして、近世城下町は、都市計画を基に中世から発達した町場と城下にある街を統合し、再編されたとされています。その近世城下町を基に、明治から戦前にかけて、成熟された都市が今の日本の町となります。近世の城下町は、都市計画等を基に再編され、さらにそこから、成熟したことで次第にジェインジェイコブズの四原則を満たすことになっていきます。

近年、DIYやリノベーションが注目されているが、そのような流れは、町つくりの再生に沿っていると思いました。これから町を再生するためには、ポートランドのように建築やデザインに制限をかけていくのも一つだと感じました。

伊藤 大智（JIA三重）
日新設計

世界劇場会議名古屋（ITCN）フォーラム2022「名古屋市の新しい市民会館を考える」報告

11月28日 開催／後援：JIA東海支部ほか

会場の様子

現在、名古屋市では老朽化した市民会館の建替えが検討されている。新しい建築が出来る時、その活用には利用者の理解が欠かせない。意欲的で先進的なプログラムが期待される公共建築であれば尚更である。少しでも機運の盛り上げと理解の支援になれば、と本フォーラムを企画した。

基調講演「創造都市名古屋に期待される新たな劇場」

佐々木雅幸（大阪市立大学名誉教授・金沢星稜大学特任教授）がボローニャ・金沢・京都・城崎など先進の事例を紹介し、マンフォードの劇場都市論に言及する。「都市は芸術を育てるとともに芸術であり、都市は劇場をつくるとともに劇場である。」と。

第一部「基本構想/名古屋市への提言」

岡田孝光（名古屋市文化歴史まちづくり部主幹）の基本構想の解説に続き、下斗米隆（ITCN理事長）が「10年計画で名古屋を創造・発信の拠点とすべき。100～300席程度の創造活動専用の独立した劇場をつくり、10日間連続公演で満席にできる団体を育てるべき。」と提言する。

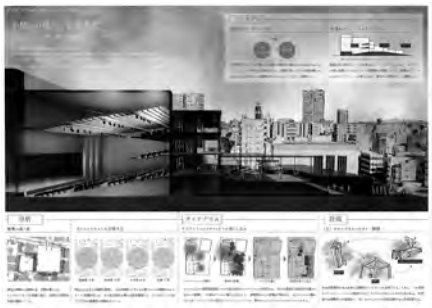
第二部「みんなで考えるこれからの市民会館のかたち」

愛知県内の建築系の4大学研究室の学生から、市民会館の計画について具体的な提案が行われる。実はこれに先立ち、約3か月にわたって各研究室とITCNによるワークショップが開催され、それぞれ特色のある案が製作された。

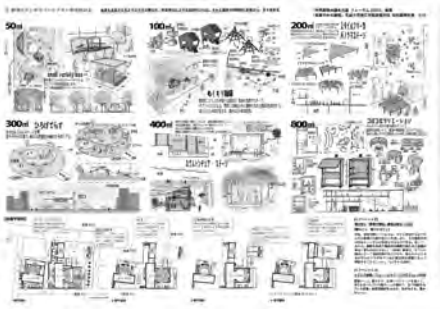
名古屋大学・恒川和久研究室は「ウォーカブル」をコンセプトに、立体的な動線計画によりシームレスに多くの活動が現れる市民会館を提案する。さらに機能を敷地外にも広げることで、都市に向けて建築の射程延長を試みた。

模型展示

恒川研「市民会館×ウォーカブル」


坂口研「手触りの感じる芸術文化」

中島研「"ごった煮"のような劇場」


谷口研「風景の中の劇場」

大同大学・中島貴光研究室は文化と空間の文脈から名古屋らしさを抽出し、「芸処名古屋の"ごった煮"のような劇場」を構築した。芸術文化団体へのアンケート・ヒアリング調査を実施し、名古屋城の石垣のように小規模な市民活動を建物の縁に積み重ねている。

名城大学・谷田真研究室は文化的創造力を活性化する手段の探求と捉え、様々な活動が磁力を持つテンポラリーな場の創出により「風景の中の劇場」をつくり出した。小さな舞台が数多く設定され、持続的に更新されることでまちを彩る。

日本福祉大学・坂口大史研究室は、舞台芸術の敷居を下げるため、子供に親しまれる市民会館であるべきと提唱する。このとき木造による「手触りの感じる芸術文化」空間が提案された。建築計画の要請に従い、グリッド・断面を徐々に変化させている。

これらの提案を受けて、川本直義（伊藤建築設計事務所）の進行でディスカッションが行われた。恒川・中島・谷田・坂口らが学生の提案を解説し、会場の聴衆はその理解を増していく。さらにコメンテーターの清水裕之（名古屋大学名誉教授）は「もっと都市全体で見た空間の使い方を提言してもよいのではないか。金山駅と繋げた広場空間とする、位の大胆なことを言っても良い。」と喝破する。

若者の瑞々しい感性による提案を肴に繰り広げられた議論が、極めて上質な知的エンターテイメントであったことを報告しておく。協力頂いた4研究室を始め、多くの関係者に感謝申し上げる。

参加と協働による、創造的な市民会館づくりへの期待

今後、名古屋市により整備方針が徐々に整理されていくことになるが、それに先んじて複数のプレデザインを示して頂いた。今回の試みは単に建築（ハード）の良し悪しを判断するものではない。新しい運営プログラムやアクティビティといったソフト面の議論促進のため、「かたち」を可視化したものである。

今後さらに多くの人を巻き込んだ「みんなの」市民会館づくりに期待したい。

細井 昭男（JIA愛知）
都市造形研究所

登録有形文化財 杉浦家住宅主屋、同書院（すぎうらけじゅうたく おもや、どうしょいん）

こちらの住宅は現在西尾市に合併されている旧幡豆郡一色町内に有り、その中心を流れる一色排水路に架かる大宝橋から西へ向かう拡幅された県道12号線の北側に立地し、周囲と比べて地盤が約45㎝程度高い所にある。(注1)

杉浦家は元禄時代末期の18世紀初頭より、岡崎の本家より分かれて当地に移住し幕末期から明治期に掛けて新田開発や塩田経営などでこの地域の産業の発展と地元寺院の再建にも貢献し、当主は名字帯刀も許され代々名前を世襲し現在(注2)に至る。明治期から昭和にかけては味噌醤油の醸造業を営まれ大きな繁栄を築かれてきた。

南側外観(右:長屋門倉庫妻面、中奥:主屋)

東側外観(長屋門正面、左:同倉庫)

敷地内には現在も往時を偲ぶ建物が残っており、今回の登録は**[主屋]**と**[書院]**(西端増築の新座敷を除く)であるが、他には主屋の北側に現在の住居が廊下で接続し、別棟で北蔵、西蔵、長屋門とそれに付属する倉庫、更に主屋・書院南側には東西に仕切られた前庭が有る。

[主屋]は玄関より奥に土間が続く「とおりにわ」の形式が残り南北を格子戸で仕切られている。この上部には太い梁が露出しており家の重厚感が表れている。そこから西に向かって10畳と8畳の部屋が三室南北二列続き計六室の間取り、その両側に縁側が取付く大規模な農家型住宅となっている。特に南面西奥にある仏間には上段の間と床脇が有り、その中央奥に仏壇が置かれ格式の高い家柄であると察する。(注3)

[書院]は主屋西側に明治期にかけて増築されており、座敷10畳二室にはその境に丈の高い透かし彫欄間や西端には床の間床脇違い棚を設け、その南北に廊下を配する間取りの近代和風建築となる。ここでは大切な賓客の接待や親族等が集まった際の行事など多目的に利用されたと推測される。(建物通常非公開)

主屋・書院南面外観(左奥:書院、右手前:主屋)

【概　要】

物　件　名:杉浦家住宅主屋、同書院
登 録 基 準:造形の規範となっている
登録年月日:[主屋]令和4年(2022)10月 [書院]同左
登 録 番 号:[主屋]第23-0583号 [書院]第23-0584号
所　在　地:愛知県西尾市一色町西屋敷44-1
建 設 年 代:[主屋]:江戸末期(嘉永2年(1849)以前・(注4))建築、大正10年頃及び昭和61年改修 建築面積188㎡
[書院]:明治中期増築 建築面積62㎡、北蔵:嘉永2年(1849)、西蔵:文化3年(1806)、長屋門:明治期(南側倉庫:昭和55年建替)
建 物 概 要:[主屋]木造2階建、屋根切妻造平入、いぶし桟瓦葺(下屋庇共)、外壁土塗壁一部下見板横鎧張押縁仕上
[書院]:同上

(注1)元々水害の多い地域のためその対策と思われる。過去の水害で下流域の近隣住民がこちらの住宅の玄関土間にて一時避難された経緯も有る。
(注2)現当主は祖先から受け継がれてきたこの住宅の保存に前向きな姿勢でおられ、西尾市の文化財ガイドボランティアもされている。
(注3)仏間上段の天井は現在杉中杢棹縁天井であるが、それ以前は和紙張であったとされる。
(注4)杉浦家所蔵資料に同年改修工事が実施された記録が有る。

野口 和樹(JIA 愛知)
野口良一設計事務所

編集後記

●倉方俊輔氏の大阪建築家ものがたり第5回綿業会館を興味深く拝読した。竣工当時の『新建築』からの引用と時代考証に始まり、筆者自身の洞察が丁寧に語られている。特に印象に残ったのは、竣工から90年ほど経た綿業会館の使われ方が、ほぼ当時のままであることだ。このくだりから、名古屋造形大学を設計した山本理顕氏の言葉に深く感銘したことを思い出した。この大学の精緻な空間構成による柔軟性をある方が称賛し、仮に大学の役目を終えても、この建築には異なる用途で残り続ける力を感じると述べた。その際に、山本氏がこの建築は何年経ても大学として使われ続けると話されていたことだ。近年の建築には、将来的に用途変更し易い柔軟性を求められることが多い。一方で、建築が生まれた姿のまま多くの人々に親しまれ、使われ続けることの大切さを、倉方氏の寄稿文により改めて認識させられた。　(宇野 享)

●前号に続き8ページ増の充実した本誌面の過半を成す「支部コンペ」記事の、圧倒的熱量にまず感服します。含蓄深い大テーマに挑む若々しい建築志向が頼もしい一方で、脈々とこの事業を担う皆様に改めて敬意を表します。興味深い倉方先生の連載にあって、今回の「綿業会館」は殊更に心惹かれました。2016年10月末の大阪でのJIA全国大会の、初日プロローグと冒頭シンポジウムの会場だった当館に初対面した折の、得も言われぬ包容力感覚が蘇りました。馴染み薄かった大阪「船場」の「街」の奥深さも体感できましたが、当時の俄か仕立ての理解を遥かに超越する新しい知見満載の一文でした。巻末カラーの中部建築賞の今年度受賞作にも注目です。審査員を含め同賞運営に関わる身として、半世紀以上に渡り中部9県の建築系譜を綴るデータベースの一巻と評します。　(鈴木 利明)

ARCHITECT
第413号
発　行　日　2023.2.1（毎月1回発行）
定　　価　380円（税込み）
発行責任者　大瀧正也
編集責任者　恒川和久
編　　集　東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イヅミ内
ARCHITECT 編集部
岡崎市明大寺町荒井10番地
TEL(0564)21-2657　FAX 26-1792
発　行　所　(公社)日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄 4-3-26　昭和ビル
TEL(052)263-4636　FAX 251-8495
E-Mail：shibu@jia-tokai.org
http：//www.jia-tokai.org/

第54回 中部建築賞の入賞・入選・特別賞作品決定

中部9県の建築関係団体で構成する中部建築賞協議会は、「第54回中部建築賞」の受賞作品を発表した。今回は、応募数一般部門A33点、一般部門B31点、住宅部門30点の計94点の応募作品の中から下記の18作品が受賞した。

表彰作品の概要は次のとおり

①所在地　②規模　③建築主　④設計者　⑤施工者　（敬称略）

一般部門A（入賞）

瀬戸市立にじの丘学園

①愛知県瀬戸市　②鉄筋コンクリート造一部鉄骨造　地上2階地下1階 15,701.46㎡ ③瀬戸市 ④久米設計 ⑤鴻池組名古屋支店

津市久居アルスプラザ

①三重県津市　②鉄骨造一部鉄筋コンクリート造　地上3階 6,081.92㎡ ③津市 ④久米設計 ⑤日本土建・アイケーディ特定建設工事共同企業体

一般部門A（入賞）

清水建設北陸支店新社屋

①石川県金沢市　②鉄筋コンクリート造一部鉄骨造　地上3階地下1階 4,224.46㎡ ③清水建設北陸支店 ④清水建設北陸支店一級建築士事務所 ⑤清水建設北陸支店

一般部門A（入選）

GOOD CYCLE BUILDING 001 浅沼組名古屋支店改修 PJ

①愛知県名古屋市　②鉄骨造　地上8階地下1階塔屋1階　2,779.64㎡ ③浅沼組 ④川島範久建築設計事務所、浅沼組 ⑤浅沼組

名城大学春日井キャンパス本館

①愛知県春日井市　②鉄筋コンクリート造　地上4階 地下1階 2,661.88㎡ ③学校法人名城大学　④青木茂建築工房・MAリファイニングシステムズ共同体 ⑤TSUCHIYA

尾鷲市役所本庁舎耐震改修

①三重県尾鷲市　②鉄筋コンクリート造　地上3階地下1階塔屋1階3,218.15㎡ ③尾鷲市 ④竹中工務店 ⑤竹中工務店・丸昇建設特定建設工事共同企業体

一般部門A（入選）

サントリー天然水北アルプス信濃の森工場

①長野県大町市 ②ものづくり棟:鉄骨造 レセプション棟:木造＋RC造 カフェ棟:木造 地上4階 42,020.48㎡ ③サントリープロダクツ ④竹中工務店大阪一級建築士事務所 ⑤竹中工務店東京本店

一般部門B（入賞）

あかばねこども園

①愛知県田原市 ②木造 地上1階 1,654.96㎡　③学校法人正円寺学園 ④名古屋大学 太幡研究室、藤川原設計、武田計画室 ランドスケープ・建築 ⑤小原建設豊橋営業所

いしざかやまこどもえん

①愛知県知多郡 ②鉄骨造 地上2階 867.45㎡　③社会福祉法人南部保育園　④日比野設計 ⑤山旺建設

一般部門B（入選）

リニモテラス公益施設

①愛知県長久手市 ②木造 地上1階 383.4㎡　③長久手市　④東畑建築事務所名古屋オフィス、ナノメートルアーキテクチャー一級建築士事務所 ⑤服部工務店

一般部門B（入選）

笹島高架下オフィス

①愛知県名古屋市 ②木造 地上2階 985.82㎡ ③名古屋ステーション開発 ④マル・アーキテクチャ ⑤シーエヌ建設

竹中工務店静岡営業所

①静岡県静岡市 ②鉄筋コンクリート造鉄骨造 地上3階 361.09㎡ ③竹中工務店　④竹中工務店 ⑤竹中工務店

一般部門B（特別賞）

星野神社 覆殿・本殿（愛知県豊川市指定文化財）

①愛知県豊川市 ②木造伝統的構法 地上1階 92.77㎡ ③星野神社 ④望月建築設計室 ⑤望月工務店

住宅部門(入賞)

薬師田の住居

①愛知県安城市 ②木造 地上2階　86.86㎡　④岩間建築設計事務所 ⑤一色建築

住宅部門(入賞)

関ケ原の家

①岐阜県不破郡 ②鉄筋コンクリート造　地上1階、塔屋1階　163.17㎡ ④Airhouse 一級建築士事務所　⑤東海建設

地形と居場所

①静岡県 ②木造一部鉄骨造 地上2階　159.07㎡　④acaa建築研究所 ⑤石和建設

住宅部門(入選)

Rural House

①三重県員弁郡 ②木造一部鉄骨造 地上1階 112.62㎡ ④葛島隆之建築設計事務所 ⑤誠和建設

土蔵と補う増築

①岐阜県高山市 ②土蔵造＋木造在来工法 地上2階塔屋1階 98.83㎡ ④澤秀俊設計環境 ⑤いもと建築